佐竹一男著「小筑紫村の方言と習俗」の研究
――見出し語に付された傍線について――

齋 藤　香 織

1. はじめに

佐竹一男著「小筑紫村の方言と習俗」（未定稿）は昭和 10 年代（1935-45 年）の高知県方言に関する資料である。本稿では、当資料の見出し語に付された傍線の分析を行い、この傍線が昭和 10 年代の小筑紫村方言のアクセントを表すものであることを明らかにする。

本稿の構成は以下の通りである。第 1 節では、本稿で対象とする「小筑紫村の方言と習俗」の概要を述べる。第 2 節では「小筑紫村の方言と習俗」の見出し語に付された傍線がアクセント表記であることを明らかにした後、傍線と現在の小筑紫町方言との対照を行い、傍線が「昭和 10 年代の」「小筑紫村の」アクセントを反映した表記である可能性が高いことを述べる。第 3 節では、アクセント表記のうち、一般的な線式アクセント表記にはみられない形状の傍線が何を示しているのかについて考察する。以上の内容を第 4 節でまとめ、今後の課題を述べる。

1.1　「小筑紫村の方言と習俗」について

1.1.1　「小筑紫村の方言と習俗」とは

佐竹一男著「小筑紫村の方言と習俗」（未定稿）（以下「方言と習俗」）は、2019 年に発見された、昭和 10 年代の高知県方言に関する資料である。「方言と習俗」は、昭和 10 年代の小筑紫村の方言語彙が記録されているだけではなく、当時の生業や祭事などの詳細な解説もなされており、方言資料としても民俗資料としても高い価値を持つものである。

旧小筑紫村（以下、小筑紫村）は高知県西部、現在の宿毛市小筑紫町域に存在した村である（図 1）[1]。著者の佐竹一男氏は大正 3（1914）年生まれで、言語形成期を小筑紫村で過ごしていたとみられる[2]。

---

[1] 宿毛市の南部に位置する地域。昭和 25（1950）年に町制が施行され、昭和 28（1953）年に周辺の 5 町村と合併し宿毛市の一部となった（宿毛市史編纂委員会（編）1977:924-928）。

[2] 著者が後年に記した、尋常高等小学校卒業から高知師範学校入学までの時期を回想した手

図１　宿毛市の位置[3]

著者は尋常高等小学校を卒業後、村内で働きながら受験勉強をし、17 歳で高知師範学校へ進学している。師範学校の同窓会名簿の情報やその後の就職状況より、調査は昭和 11（1936）年から数年の間に行われていたとみられる。また、「方言と習俗」の成立時期は昭和 11（1936）年から昭和 20（1945）年までの 9 年間であると推定される[4]。

1.1.2　資料の構成

「方言と習俗」は、2 冊の綴じられた原稿用紙の束からなる資料で、清書済みの未定稿である。「小筑紫村の方言と習俗」がこの 2 冊全体の題名であるとみなせるため、本稿では以下の 2 資料（「小筑紫村の方言と習俗」から始まる冊子（以下「採集」）と「二　部類別農事についての方言と習俗。」から始まる冊子（以下「部類別」））の総称として「方言と習俗」を用いる[5]。また、「方言と習俗」が発見された引き出しには、他にも 2 つの資料（「方言抄（一）」と『伊予大三島北部方言集』）が納められていた。以下に資料の概要を述べる。

・「小筑紫村の方言と習俗」から始まる冊子（「採集」）

記や、高知師範学校同窓会名簿の情報から、少なくとも尋常高等小学校時代から高知師範学校入学までは小筑紫村で過ごしていたと考えられる。

[3] 「白地図専門店」http://www.freemap.jp/より引用･加工。

[4] 以上の詳細は佐竹（2020）を参照。

[5] 2 資料の成立順は定かではないが、原稿用紙の端に書き込まれた番号が「採集」から「部類別」にかけて並んでいることから、「採集」の成立が先であったと考える。

141 ページからなる資料で、2 枚目の原稿用紙には「(一) 語彙の採集」と記されている。見出し語 1943 項目が五十音順に配列され、各語の意味や例文が記述されている。

・「二　部類別農事についての方言と習俗。」から始まる冊子（以下「部類別」）
154 ページからなる資料。「採集」の語が「農事」「漁村」などの 22 の部類に分類、再配列され、以下の例のように見出し語に対して詳細な語釈が付されている。

アサクサカリ　朝草刈。牛馬の飼料として遠方の山野の草を、未明から刈りに出る。（「採集」）

アサクサカリ　夏の頃の農夫の仕事の一として、早朝食事前迄に遠方の山野に行て、牛馬の飼料になる、雑草、葛などを多量に刈りとって帰るのが、此の村の習慣で、時には、百姓として腕が立つといはれるか否かはこの朝草刈に励むか否かにとはれてゐるといってよい。（「部類別」）

・「方言抄（一)」と題されたノート（以下「方言抄」）
「方言と習俗」の草稿もしくは解説とみられるノートで、未完である。

・藤原与一（1943)『伊予大三島北部方言集』(第 1 刷)
部類立て構成の方言資料。類似する構成や入手時期、藤原与一氏と佐竹一男氏の世代と出身地域の近さから、「方言と習俗」と何らかの関係があると考える。

1.2　傍線について

「方言と習俗」では、見出し語と説明文中の一部の語に、図 2 のような傍線が付されている。傍線は「採集」では 2087 語中[6]、1767 語（約 85%）に記載があるため、何らかの意図によって書かれたものであると考える。本稿ではこれらの傍線の分析を行う。

[6] 「採集」では、同義語で語形が近い場合に、1 つの見出しに複数の語が掲載されている場合がある。2087 語は、1 つの見出しに属する複数の語を、個別の語として分割した場合の語数である。

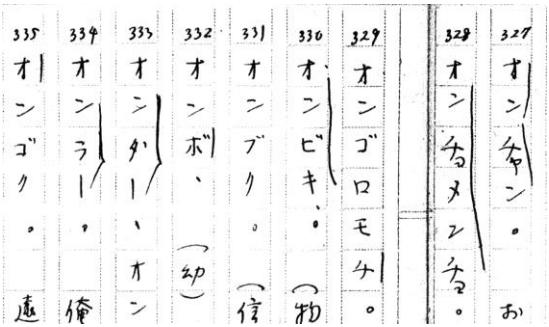


図 2　見出し語に付された傍線

1.2.1　資料内の記述から読み取れること

現代の辞書類を見慣れた者にとっては、見出し語に付された傍線はアクセント表記であるように思われる。しかし、「方言と習俗」や「方言抄」に傍線の凡例は見当たらないため、傍線がアクセント表記であると断定することはできない。

凡例はないものの、傍線がアクセント表記であることを示唆する記述はある。「方言抄」(p.4) のアクセントの概説とみられる箇所（図 3）では、「上上型」の「アメ」には「アメ」全体に傍線が、「上下型」の「アシ」には「ア」のみに傍線があり、一般的な線式のアクセント表記のように、高音調の拍に傍線が付されている。

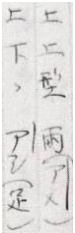


図 3　「方言抄」のアクセント表記[7]

また、「方言と習俗」の成立時期に近い時代に出版されたアクセントに関する概説書（服部 1933, 平山 1940）でも、アクセントが線式で表記されていることから、

[7] 関西方言における 2 音節語のアクセントに関する記述の一部分。

昭和 10 年代において高音調の拍の右側に傍線を引くという表記法は珍しいものではなく、「方言と習俗」の傍線も同様の体裁を取ったものと考える。

さらに、「方言抄」の導入にあたる部分には、以下のような記述がある。

> 幡多方言は、不思議な形態を具へてゐまして、（中略）尚、その音韻におきましては関西にありながらも関東、東北と一致してゐるのであります。（p.3，下線は稿者）

アクセントは広義の音韻に含まれる要素である[8]。下線部の内容から、この文で言及されている「音韻」はアクセントの意味ととらえるのが妥当である。

傍線がアクセント表記であるという確証はないが、「方言抄」の記述を見る限りにおいて、傍線は「方言と習俗」の執筆当時の小筑紫村方言もしくは幡多方言（1.3 で後述）のアクセントを表している可能性が高いと考える。

1.2.2 形態の整理

以上の「方言抄」の記述より、「方言と習俗」の見出し語に付された傍線は、線式のアクセント表記であると仮定する。その上で、2.1 では隣接地域の方言のアクセント資料との対照によって、2.2 では現在の小筑紫町方言との対照によって、傍線が確かにアクセントを表記したものであるということを実証したい。

これらの分析を行う前に、まずは傍線の外形的な特徴を整理して示す（表 1）。傍線の要素のうち、分析対象となり得るのは、線の有無、位置、形状である[9]。線形は稿者が区別したところでは 10 種類以上に細別できるが、本稿ではこのうち直線･はね線･山型線を扱う。

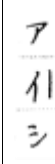
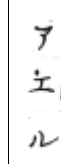
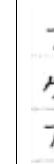
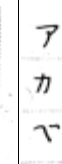
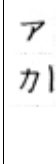
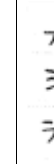
考察に際し、線の付されている拍を高音調、付されていない拍を低音調と仮定し、それぞれ H、L の記号で表すこととする。

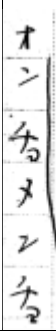
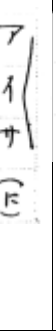
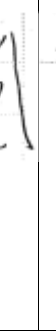
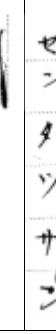
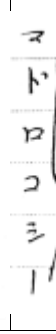
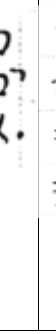
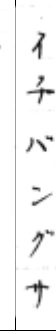
---

[8] 音韻とは「ある特定の言語･方言の構造を記述しようとするとき、音のレベルで相互に区別されるものとして抽出される単位」（『日本語学大辞典』「音韻」の項（相沢正夫執筆））のこと。広義の音韻の定義も『日本語学大辞典』の記述による。

[9] 本稿では線末端位置について詳しく述べないが、内部徴証の分析により、はね線や山型線では線の末端位置よりも、線形それ自体と線によって強調されている拍が重要であるということが判明している。表 1 では、16 種類の線の形態が挙げられているが、現在のところ、確実に独立した線形であると考えられるのは、直線･はね線･山型線の 3 種類である。

表 1　線形の整理

要素	線の有無		線の付いている箇所			線形（本稿で扱うもの）			
分類	（なし）	（あり）	（1 拍）	（複数拍）	（複数個所）	直線	はね	山型	重ね書き
例									

要素	線形（本稿では扱わないもの）											
分類	外折れ	谷型	斜め	反り	内折れ	山（大）	濃い線	点	（始）曲げ	（始）逆曲げ	（終）内かぎ	（終）外かぎ
例												

1.3　幡多方言アクセントについて

本論に入る前に、小筑紫村方言が属する幡多方言のアクセントについて述べる。高知県には大きく分けて 2 種類の方言が存在する（図 4）。高知市を含む県東部（図 4 の A）で用いられる東ことばに対し、中村市と檮原町を結んだ線よりも西側（図 4 の B）で用いられる方言は西ことば（通称幡多方言、以下幡多方言とする）と呼ばれている。『新明解日本語アクセント辞典』の記述によれば、東ことばが京阪式のアクセントであるのに対し、小筑紫町を含む幡多西部の方言は東京式内輪アクセントである。

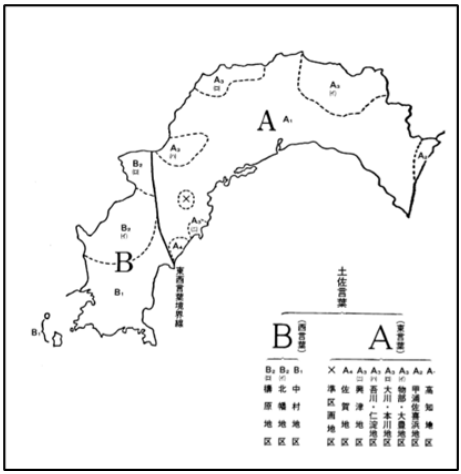


図 4　土佐言葉区画図（『高知県方言辞典』）

2.　「小筑紫村の方言と習俗」の傍線の分析

第 1 節で述べたように、「方言と習俗」には、アクセント表記のような傍線が存在する。しかし、資料内に傍線の凡例はなく、アクセント表記であるかどうかは不明である。また、図 2 や表 1 にみられるような特殊な形状の傍線も存在しており、これらがどのような現象を記述しようとしたものであるのかも不明である。

第 2 節では、「方言と習俗」の傍線が、「昭和 10 年代の」「小筑紫村方言の」アクセントを示しているという前提で考察を進め、傍線がアクセント表記であることを確かめる。仮に傍線がアクセント表記であった場合、「方言と習俗」は昭和 10 年代の方言アクセントを記した珍しい音声資料であるということになる。また、高知県方言においては、昭和前期に幡多地方の特定の一地域で行われていた方言のアクセントが記録されている貴重な資料として位置づけられる。

以下、2.1 では近隣地域のアクセント資料を用いて傍線がアクセント表記であることを証明する。続いて 2.2 では、傍線のうち特殊な形状の傍線が何を意図して記されたものであるのかを現地調査によって確かめ、第 3 節でははね線と山型線について考察する。

2.1　傍線はアクセント表記かどうか

まずは傍線がアクセント表記であることを確定させるため、「方言と習俗」の傍線と当時のアクセントが記録された他の資料との間に、何らかの対応関係が見ら

れるかどうかを調査する。そのために本稿では、中平満洲氏による 6 本の論文（中平 1963, 1964a, 1964b, 1965a, 1965b, 1967、以下「中平論文」）を参照する。

2.1.1　中平論文について

中平論文は、小筑紫町の東隣に位置する幡多郡三原村（図 1 参照）の方言語彙に関する論文で、各見出し語にはアクセント表記が付されている（図 5）。

中平(1967:45)のアクセント表記	中平(1967:50)の音節に付されたアクセント表記
ばばいい　|まばゆい	（柿）ぶうばり　|寝小便

図 5　中平論文のアクセント表記

比較に際して問題となるのが、2 地域のアクセントが比較可能かどうかという点であるが、宇和島以南地方と幡多郡西南地区の語彙やアクセントについて述べた杉山（1955）の臨地調査の結果によれば、小筑紫町も三原村も同じ乙種アクセント地帯に含まれているため、小筑紫村方言を記録した「方言と習俗」と三原村方言を記録した中平論文のアクセントは、比較可能であると判断した。

杉山（1955）の記述をふまえ、中平論文の三原村方言と「方言と習俗」の小筑紫村方言が互いに近いアクセント体系を持っているという前提のもとに、この 2 資料を比較する。2 資料の表記に関係が見出されれば、「方言と習俗」の傍線はアクセント表記であると確定できる。

・印と傍線の関係を明らかにするために、中平論文と「方言と習俗」で対応関係にある 2-4 拍語 132 語について、・印の位置と傍線の位置を対照する[10]。なお、中平論文には、「・印はアクセントの所在を示す」（中平 1963:14）という記述があるものの、・印についてそれ以上の説明はないため、アクセントのどういった「所在」を示しているのかは不明である。しかし、少なくとも・印のある拍は高音調

[10] 「対応関係にある語」は、中平論文と「方言と習俗」において同音類義の語、もしくは、類似した語形をもち 2 資料間で語義が 1 つでも一致している語を指す。同義語で形態が近くとも、語中に長音が挿入されるなどして拍数が異なっている場合には対象外とした。中平論文で・印の無い語、「方言と習俗」で特殊な形状の傍線しか現れない語、傍線は直線だが音調不明の拍がある語、「採集」と「部類別」で直線の位置が異なる語も対象外とした。5 拍以上の語も、複合語アクセントの影響が現れると考えて対象外とした。傍線が、「採集」「部類別」の一方では直線、もう一方では特殊な形状という場合には、直線の表記のみを反映させた。

であると考えられるため、・印の付いている拍を高音調として集計を行った[11]。

2.1.2　結果

表 2 に、中平論文の・位置と「方言と習俗」の傍線の位置の対照結果を示す。

表 2.1　中平論文のアクセント表記との対照結果（拍数別）

拍数	中平論文	方言と習俗	語数
2	HL	HL	13
	LH	HL	1
		LH	17
	計		31
	（一致率		97%）
3	HLL	HLL	7
	LHL	LHL	29
		LLH	3
	LLH	LHH	1
		LHL	6
		LLH	19
	計		65
	（一致率		85%）
4	HLLL	HLLL	4
		LHLL	1
	LHLL	HHLL	1
		HLLL	1
		LHLL	2
	LLHL	LHLL	1
		LLHL	15
	LLLH	HLLL	2
		LHHH	2
		LLHH	2
		LLHL	1
		LLLH	4
	計		36
	（一致率		69%）
全体			132
	（一致率		83%）

[11] 仮名の中間に・印がある場合（図 5 右）はその音節を H とみなし、以降の表では HH とした。

表 2.2　中平論文のアクセント表記との対照結果（品詞別）

品詞	拍数	中平論文	方言と習俗	語数
名詞	2	HL	HL	11
		LH	LH	16
		計		27
		（一致率		100%）
	3	HLL	HLL	5
		LHL	LHL	10
			LLH	2
		LLH	LHH	1
			LHL	5
			LLH	14
		計		37
		（一致率		78%）
	4	HLLL	HLLL	3
			LHLL	1
		LHLL	HHLL	1
			HLLL	1
			LHLL	1
		LLHL	LHLL	1
			LLHL	1
		LLLH	HLLL	2
			LHHH	2
			LLHH	2
			LLHL	1
			LLLH	4
		計		20
		（一致率		45%）
名詞全体				84
		（一致率		77%）

品詞	拍数	中平論文	方言と習俗	語数
動詞	2	HL	HL	2
		LH	HL	1
	3	LHL	LHL	14
		LHL	LLH	1
		LLH	LHL	1
		LLH	LLH	2
	4	LLHL	LLHL	4
	計			25
	（一致率			88%）
形容詞	3	HLL	HLL	1
		LHL	LHL	4
		LLH	LLH	3
	4	LLHL	LLHL	6
	計			14
	（一致率			100%）
形容動詞	3	LHL	LHL	1
	4	HLLL	HLLL	1
		LHLL	LHLL	1
	計			3
	（一致率			100%）
副詞	2	LH	LH	1
	3	HLL	HLL	1
	4	LLHL	LLHL	4
	計			6
	（一致率			100%）
全体				132
	（一致率			83%）

はじめに、拍数別の対照結果を述べる（表 2.1）。中平論文と「方言と習俗」のアクセント表記の位置が一致していた語は、2 拍語では 31 語中 30 語（97%）、3 拍語では 65 語中 55 語（85%）、4 拍語では 36 語中 25 語（69%）であった。

アクセント研究では、対象とする地域のアクセント体系を 2 拍語や 3 拍語のアクセントによって判断する。これらの語ではアクセントの個人差や地域差が小さいためである。2 拍語のアクセント表記の一致率が 100%に近いことや、3 拍語のアクセント表記の一致率が 80%を上回るという結果は、三原村と小筑紫村のアク

セント体系の類似性を反映するものであると考える。

また、4 拍語以上になると近い地域でもアクセントに差が現れ、個人差も大きくなる。拍数が増えるごとにアクセント表記の一致率が低下するのは、アクセントの特性を反映しているためであると考える。

次に品詞別の対照結果を述べる（表 2.2）。形容詞･形容動詞･副詞については、対照可能であった 23 語すべてで･印と傍線の位置が一致していた。一方、名詞では 84 語中 65 語（77%）、動詞では 25 語中 22 語（88%）の一致にとどまり、形容詞･形容動詞･副詞に比べ一致率が低いが、これは分母の大きさの違いによるものであろう。また、3-4 拍の名詞のうち、中平論文のアクセントが LLH･LLLH の語では､･印と傍線の位置の一致率が特に低いが､その原因は現時点では不明である。

拍数や品詞によって差はあるものの、全体としては 132 語中 110 語（83%）で･印と傍線の位置が一致している。以上の結果に基づけば、中平論文のアクセント表記と「方言と習俗」の傍線は対応関係にあるといえるため、傍線が小筑紫村のアクセントを表記したものであるという前提の妥当性も高いといえる。

2.2　傍線の表すアクセントの考察

2.1 の結果より､｢方言と習俗｣がアクセント資料であることが明らかとなった。

しかし､｢方言と習俗｣をアクセント資料として利用するためには、はね線や山型線などの特殊な形状の傍線が示すアクセントを解明する必要がある。特殊な傍線が示すアクセントを分析するためには、昭和 10 年代の小筑紫村方言の音声資料を参照することが理想であるが、そうした資料は現在のところ確認されていない。昭和 10 年代の小筑紫村方言のアクセント（以下、戦前小筑紫アクセント）の手掛かりは、「方言と習俗」のアクセント表記のみである（図 6①）。

そうした状況において､｢方言と習俗｣のアクセント表記を分析する際に最も有力な証拠となるのは、現在の小筑紫町方言のアクセント（以下、現小筑紫アクセント）である（図 6②）。昭和 10 年代から現在まで約 80 年の隔たりはあるものの、戦前小筑紫アクセントと現小筑紫アクセントが大きく変化していないのであれば、現小筑紫アクセントを戦前小筑紫アクセントの代わりとして分析に用いることができると考える（図 6③）。

以上の考えに基づき、2.2.1 では、戦前小筑紫アクセントと現小筑紫アクセントの体系を比較し、両者に大きな変化がないことを明らかにする。2.2.2 では、2.2.1 の結果に基づき、戦前小筑紫アクセントと現小筑紫アクセントの体系を共通のものとみなして、現小筑紫アクセントを戦前小筑紫アクセント、つまり「方言と習俗」に記録された実際の発話の代わりとして用いることによって、「方言と習俗」のアクセント表記の分析を行った（図 6 下）。

分析を行う前に、実際の発話とアクセント表記の間にある、調査者のアクセント認識というフィルターについて述べる。現在、アクセントは二段観によって解釈されるのが一般的である。本稿の現地調査のデータも二段観によって解釈したものである。

「方言と習俗」の著者のアクセント認識は不明であるが、「方言と習俗」や「方言抄」において、3 段階の音高表記に特徴的な低音調の表記がみられないため、二段観を採用していると考える。しかし、「方言と習俗」のアクセント表記には 3 段階の音高が記録されているとみられるものも存在する（第 3 節で後述）。そのため、著者のアクセント認識は、3 段階の音高表記を認める二段観であったと仮定する[12]。そしてこのようなアクセント認識の結果として、「方言と習俗」のアクセント表記がなされているものと解釈する。

以上の前提のもと、2.2.2 では、稿者が二段観で解釈した現小筑紫アクセントを戦前小筑紫アクセントの代わりとして用い、「方言と習俗」のアクセント表記を分析する（図 6 下）。

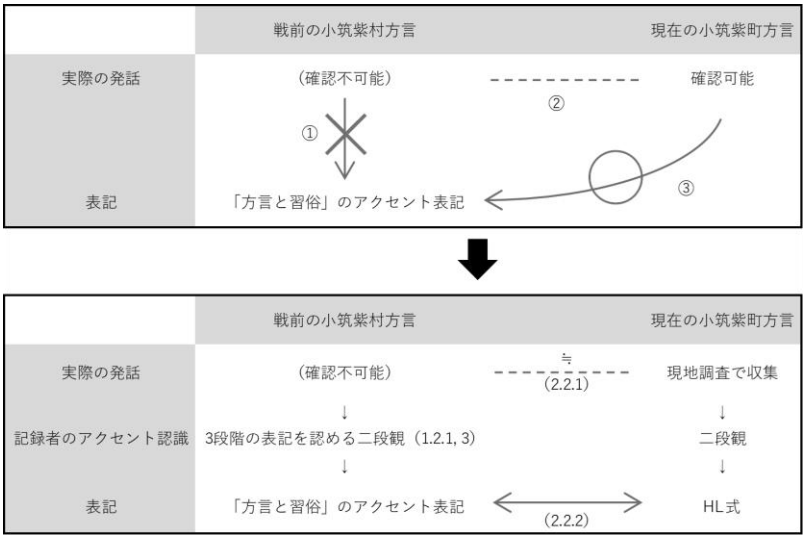


図 6　「方言と習俗」のアクセント表記分析の流れ

[12] 1.2.1 で取り上げた昭和 10 年代近辺に出版された文献（服部 1933, 平山 1940）も、音高を 3 段階で表す意義については認めているものの、解釈としては二段観を採用している。

2.2.1 昭和10年代の小筑紫村方言と現在の小筑紫町方言のアクセント体系比較

まず、現小筑紫アクセントを戦前小筑紫アクセントの代わりとすることの可否について考察するため、1900年代、1940年代生まれの小筑紫町方言話者のアクセントを記録した山口（2003）を参照する。

2.2.1.1 山口（2003）について

山口（2003）は四国西南部方言のアクセント体系を解明するために、現地調査によって当地のアクセント体系を記述した論文である。山口（2003）の話者は 4 名で、本稿ではこのうち宿毛市の話者 2 名のデータを参照する[13]。

山口（2003）の話者のうち 1 名は小筑紫町内外ノ浦[14]在住で、明治 41（1908）年生まれである。「方言と習俗」の著者は大正 3（1914）年生まれであり、山口（2003）の話者より 6 歳年下である。もう 1 名は、昭和 17（1942）年生まれの宿毛市野地[15]の話者であり、後述する現在の小筑紫町の話者より 10 歳年上である。なお、山口（2003）の 2 名の話者のアクセント体系はほぼ共通している[16]。

ここで、山口（2003）の 2 名の話者、「方言と習俗」の著者、現在の小筑紫町方言の話者を生年順に、

A　山口（2003）の宿毛市小筑紫町方言話者
B　「方言と習俗」の著者佐竹氏
C　山口（2003）の宿毛市野地方言話者
D　現在の宿毛市小筑紫町方言話者

とし、アクセント体系の関係を整理する（図 7）。

---

[13] 昭和 59（1984）年に行われた調査による。調査項目は語のアクセント、活用形アクセント、体言の助詞接合形のアクセントである。なお、他の 2 名は市外の話者である。
[14] 小筑紫町の北西部にある地域。
[15] 宿毛市西部の山間に位置する地域。
[16] 山口（2003）の初出である山口（1986）による。この 2 名の話者は、3 拍名詞のアクセントでは 204 語中 174 語、活用形アクセントでは 206 項目中 204 項目、体言の助詞接合形のアクセントでは 25 項目中 21 項目で結果が一致している。

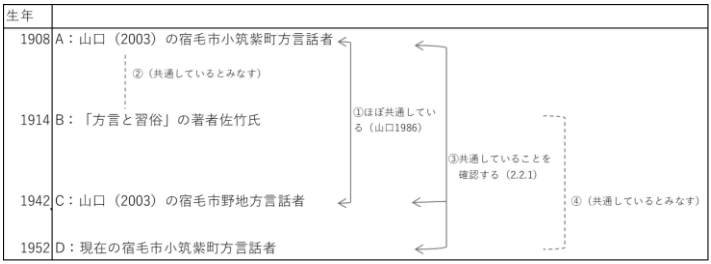


図 7　2.2 で登場する話者の関係図

先述のように、A と C のアクセント体系はほぼ共通していることが確かめられている（図 7①）。また、A と B、B とともに生活していた人々のアクセント体系は共通していると考える（図 7②）。2.2.1 では、A･C と D のアクセント体系がほぼ共通していれば（図 7③）、B とともに生活した人々と D のアクセント体系は共通している（図 7④）とみなせると考え、A･C と D のアクセント体系を比較する。

2.2.1.2　現在の小筑紫町方言アクセントの調査について

現在の小筑紫町方言のアクセント体系の調査は、2019 年 8 月に小筑紫町方言話者（1952 年生, 調査時 67 歳/男性/小筑紫町小筑紫生え抜き/1 名）の協力を得て行った。調査の形式は読み上げ式で、読み上げは基本的に各項目 1 回ずつである。調査項目は、山口（2003）から抜粋した単語（名詞 73 語･動詞 28 語･形容詞 12 語）である[17]。

2.2.1.3　アクセント体系の対照結果

表 3 は名詞・動詞・形容詞の拍数ごとのアクセント一致率を整理したものである[18]。山口（2003）の小筑紫町方言話者アクセントと、現在の小筑紫町方言話者アクセントは、名詞では 73 語中 51 語（70%）、動詞では 28 語中 25 語（89%）、形容詞では 12 語中 11 語（92%）、全体では 113 語中 87 語（77%）で一致していた。

東京式のアクセントにはみられない、特殊拍に核がある語のアクセントについても、撥音や連母音末に核があるものについてはある程度一致している。一方で、

[17] アクセントは調査時のメモと録音の書き起こしによって確認した。調査項目は、口語で一般的に用いられる語であることを条件に、類と核の位置を考慮して選定した。この他に、山口（2003）において「特殊拍に核のある語」として記載のある語を取り上げた。また、この調査と同時に、山口（2003）の活用形アクセント（17 語、各 12-9 項目）と体言の助詞接合形のアクセント（助詞 5 語･名詞 5 語の計 25 項目）の調査も行っている。活用形アクセントは調査で確認できた 177 項目のうち 129 項目（73%）で一致、助詞アクセントは 25 項目のうち 20 項目（80%）で一致していたため、これらのアクセント体系も、山口（2003）の話者と現在の小筑紫町方言話者の間でおおよそ共通しているとみる。

[18] 語の類は金田一（1974）の類別語彙表によるものである。表中の「?」は類が不明であることを示す。

3 拍名詞のうち命･兎･兜類や、山口（2003）において長音に核があると記述されている語など、一致率が目立って低い語群があるという結果は、語類などの特定の要素に関連するアクセント体系に変化が起きていることを示唆する[19]。

表 3　山口（2003）と現在の小筑紫町方言話者のアクセント一致率

拍･品詞	（類）	語数	一致語数	一致率
1 拍名詞	1	3	3	100%
	2	2	1	50%
	3	2	2	100%
	計	7	6	86%
2 拍名詞	1	3	3	100%
	2	4	3	75%
	3	4	3	75%
	4	2	2	100%
	5	3	3	100%
	?	1	1	100%
	計	17	15	88%
3 拍名詞	形	3	3	100%
	小豆	2	2	100%
	頭	5	5	100%
	命	6	2	33%
	兎	5	2	40%
	兜	4	1	25%
	?	15	9	60%
	計	40	25	63%
名詞特殊拍アクセント（※3 拍語と重複あり）	撥音	6	5	83%
	長音	2	0	0%
	連母音末	6	4	67%
	計	14	9	64%
名詞計		73	51	70%
合計		113	87	77%

拍･品詞	（類）	語数	一致語数	一致率
2 拍動詞	1･2 拍	4	3	75%
	1	2	2	100%
	2	1	1	100%
	計	7	6	86%
3 拍動詞	2･3 拍-1	1	1	100%
	2･3 拍-2	2	2	100%
	1	2	2	100%
	2	1	1	100%
	歩く	1	1	100%
	計	7	7	100%
4 拍動詞	4･3 拍-1	1	1	100%
	4･3 拍-2	2	2	100%
	?	2	2	100%
	計	5	3	60%
5 拍動詞	計	9	7	78%
動詞計		28	25	89%
2 拍形容詞	無い･良い	1	1	100%
	?	1	0	0%
	計	2	1	50%
3 拍形容詞	1	1	1	100%
	2	2	2	100%
	計	3	3	100%
4 拍形容詞	2	1	1	100%
	?	2	2	100%
	計	3	3	100%
5 拍形容詞	計	4	4	100%
形容詞計		12	11	92%

以上の結果より、戦前小筑紫アクセント体系と現小筑紫アクセント体系は、一部の語群を除いておよそ同じものであるとみなせる。この結果に基づき、「方言と習俗」のアクセント表記の分析において、現小筑紫アクセントを参考とすることは可能であると判断する。

[19] これらのアクセントについて十分なデータが存在しないため、現在のところ詳細は不明である。語類ごとのアクセントの変化や、一般的な東京式アクセントではみられない位置に核を持つ語のアクセントの変化については、今後の課題である。

2.2.2 「小筑紫村の方言と習俗」のアクセント表記と現在の小筑紫町方言のアクセントの比較

2.2.2 では 2.2.1 の結果をふまえ、戦前小筑紫アクセントに代わるものとして現小筑紫アクセントを用い、「方言と習俗」のアクセント表記の分析を行う。

2.2.2.1 現在の小筑紫町方言のアクセント調査について

現小筑紫アクセントの調査は、宿毛市小筑紫町において 2019 年 4 月 30 日～5 月 3 日、7 月 29 日、8 月 22 日～29 日に実施した。話者は小筑紫町で出会った人々（40 代-100 歳/男女/小筑紫町もしくは幡西方言話者/46 名）である[20]。なお、ここで扱っているデータは、アクセントの確認を目的とした質問調査によって得たものではなく、語彙調査の際に発話されたアクセントを記録したものである。

2.2.2.2 対照結果

以下では、現小筑紫アクセントと「方言と習俗」のアクセント表記の対照結果を述べる。分析の対象とした語は、調査でアクセントを得られた「方言と習俗」の見出し語のうち、2-4 拍でアクセント表記が直線･はね線･山型線のいずれかである語と、傍線の付されていない語の合計 389 語である[21]。対照結果は表 4 に示す[22]。

先に「方言と習俗」のアクセント表記が直線である語について述べる。アクセント表記が直線である語については、「方言と習俗」と中平論文の間でアクセント表記の対応が確認されているため、現小筑紫アクセントとも対応していることが予想される。

---

[20] 幡西とは、宿毛市や大月町（宿毛市の南に位置する町）周辺を示す語で、この地域内ではアクセント体系や音声現象の特徴が類似しているとされる（土居 1958:171-172）。46 名のうち、ほとんどの話者は、幡西地域で言語形成期を過ごしているか、言語形成期の途中から幡西地域に暮らしている。通りすがりの人物も含まれているが、場の状況から判断して小筑紫町かその周辺地域に暮らしているとみられる人物である。

[21] 「方言と習俗」において、表記の問題や語中の促音によって音調不明となっている拍がある語は除いた。動詞や形容詞のアクセントは終止形のアクセントのみを対象とした。

[22] 「「方言と習俗」アクセント」列の「(/〇含む)」は、「採集」と「部類別」でアクセント表記が異なっている語が含まれていることを意味する。「?」は現地で複数回確認できたものの、いずれも異なるアクセントであったなどの理由で、アクセントが不明であることを示す。「現地調査」列の「不一致」列の**太字**は、「方言と習俗」のアクセント表記に対応していると考えられる現小筑紫アクセントを示す。

表 4　「方言と習俗」のアクセントと調査で得たアクセントの比較

拍数	「方言と習俗」アクセント	現地調査 一致（語）	現地調査 不一致（語）
2	HH		LH(2)
	HL	25	LH(6) ? (4)
	LH（/はね含む）	21	HL(2 ? (7)
	はね（/LH 含む）	-	HL(2) **LH(13)** ?(1)
	傍線なし	-	LH(4)
3	HHH（/はね）		LHH(2)
	HHL（/HLL）		?(1)
	HLL（/HHL 含む）	7	LHH(1) LHL(2) ?(4)
	LHL（/はね含む）	18	LHH(12) ?(9)
	LLH（/はね含む）		**LHH(24)** LHL(1) ?(2)
	はね（/直線含む）	-	HLL(2) **LHH(59)** LHL(3) ?(3)
	山	-	HLL(1) LHH(1) ?(1)
	傍線なし	-	LHH(7) ?(1)

拍数	「方言と習俗」アクセント	現地調査 一致（語）	現地調査 不一致（語）
4	HHLL（/HLLL）		?(1)
	HLLL（/HHLL 含む）	5	HHLL(1) LHLL(1) LHHL(1) LHLL(1) LHHH(1) ?(4)
	LHLL（/山含む）	11	HLLL(4) LHHH(6) LHHL(1) ?(1)
	LLHH（/はね）		LHHH(1) LHHL(1)
	LLHL（/はね、/山含む）	1	**LHHH(8)** **LHHL(7)** LHLH(1) LHLL(2) ?(4)
	LLLH（/はね含む）		LHHH(5) ?(3)
	はね（/直線含む）	-	HLLL(1) **LHHH(58)** LHHL(6) LHLL(1) ?(6)
	山（/直線含む）	-	**LHHH(3)** **LHHL(4)** LHLL(1) ?(2)
	傍線なし	-	LHHH(7) LHHL(1) ?(1)

まず 2 拍語について述べる。「方言と習俗」のアクセント表記が HL である 35 語のうち 25 語（71%）と、LH である 30 語のうち 21 語（70%）は「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントが一致していた。しかし、「方言と習俗」のアクセント表記が HH である語に関しては、現地調査で HH のアクセントを確認することはできず、LH のアクセントが確認された。この結果より、「方言と習俗」において直線で示されるのアクセントのうち、HL と LH については、現小筑紫アクセントと対応しているといえる。

3 拍語では、「方言と習俗」のアクセント表記が HLL のものは 14 語中 7 語（50%）で、LHL のものは 39 語中 18 語（46%）で、現在の小筑紫町でも同様のアクセントが確認された。2 拍語における「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントの一致率に比べれば割合は低いものの、アクセント表記が HLL の語は現在も HLL で、アクセント表記が LHL の語は現在も LHL で確認される場合が最も多かった。よって、HLL･LHL については、「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントが対応しているといえる。

一方、「方言と習俗」のアクセント表記が HHH･HHL･LLH である語については、現地調査において表記通りのアクセントを確認することはできなかった。このうち「方言と習俗」のアクセント表記が HHH･LLH である語は、現地調査において LHH で確認される場合が多かった。

4 拍語では、「方言と習俗」のアクセント表記が HLLL のものは 14 語中 5 語（36%）で、LHLL のものは 23 語中 11 語（48%）で現在の小筑紫町方言においても同じアクセントが確認された。2 拍語･3 拍語における「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントの一致率に比べれば割合は低いものの、アクセント表記が HLLL の語は現在も HLLL で、アクセント表記が LHLL の語は現在も LHLL で確認される場合が最も多かった。よって HLLL･LHLL については、「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントが対応しているといえる。

一方、「方言と習俗」のアクセント表記が HHLL･LLHH･LLHL･LLLH である語については、現地調査において表記通りのアクセントが確認されることはほぼなかった。このうち「方言と習俗」のアクセント表記が LLHL･LLLH である語は、現地調査において LHHH で確認される場合が多かった。

上記の対照結果から、「方言と習俗」のアクセント表記が現代東京式アクセントに型として存在するアクセント（HL･LH･HLL･LHL･HLLL･LHLL）である場合には、現在の小筑紫町方言でも同様のアクセントが用いられているといえる。一方、「方言と習俗」のアクセント表記が、現代東京式アクセントに型として存在しないアクセント（HH･HHH･HHL･LLH･HHLL･LLHH･LLHL･LLLH）である場合には、現小筑紫アクセントとの対応関係が確認できなかった。このうち、HH･HHH･LLH･LLHL･LLLH は 1 拍目以外が高音調のアクセント（LH･LHH･LHHH）で現れる場合が多かった[23]。

ここまで、「方言と習俗」において直線が付されている語については、そのアク

[23] その原因は不明であるが、「方言と習俗」の表記にあるようなアクセントが現在までに平板化した、昭和 10 年代にもこれらのアクセントは存在はしていたが LH･LHH･LHHH の内部変異であった、現代東京式アクセントでは耳慣れないものであるため、稿者が LH･LHH･LHHH のアクセントとして聞き取ってしまった、などの可能性が考えられる。

セントが現代東京式アクセントに型として存在する場合に限り、直線の付された拍が現小筑紫アクセントの高音調の拍と対応していることを明らかにした。

続いて、「方言と習俗」のアクセント表記が直線以外である語について述べる。「方言と習俗」のアクセント表記がはね線の語については、2 拍語の 16 語中 13 語（81%）、3 拍語の 67 語中 59 語（88%）、4 拍語の 72 語中 58 語（81%）が現地調査において LH･LHH･LHHH というアクセントで確認された。この結果より、はね線は 1 拍目以外が高音調というアクセントを示す線形であるといえる。

「方言と習俗」のアクセント表記が山型線の語については、現地調査で得られたデータが少なく、アクセントのばらつきも大きいため、ここでは対応関係について触れないでおく。なお、はね線と山型線については、重線も併せて、次節で詳しく考察する。

「方言と習俗」のアクセント表記がない語（表 4 の「傍線なし」の語）については、いずれの拍数の語においても LL･LLL･LLLL 以外のアクセントが確認されているため、傍線がないことが低平のアクセントを表しているのではないと考える[24]。また、傍線のない 21 語中 18 語（86%）が現地調査において LH･LHH･LHHH で確認されているが、傍線を表記しないことによってこれらのアクセントが示されているというよりは、現代東京式アクセントにおいて尾高型･平板型の勢力が大きいことが関係していると考える。

以上、「方言と習俗」でアクセント表記が直線･はね線･山型線である語とアクセント表記のない語について、現小筑紫アクセントをもとに分析を行い、

①「方言と習俗」のアクセント表記が直線かつ現代東京式アクセントに型として存在するアクセントである場合には、現小筑紫アクセントとの対応関係があること

②はね線は 1 拍目以外が高音調のアクセント（LH･LHH･LHHH）を示していること

③傍線がないということが低平のアクセントを示しているわけではないこと

の 3 点を明らかにした。

第 2 節では、「方言と習俗」の傍線が「昭和 10 年代の」「小筑紫村方言の」アクセントを示しているという前提で調査を進めていた。2.2.2 では、昭和 10 年代に成立した「方言と習俗」のアクセント表記と現小筑紫アクセントに対応関係があ

[24] 傍証として、内部徴証から読み取れることを述べておく。「採集」「部類別」の両方に掲載されている 1057 語について、2 資料ともにアクセント表記のあるものは 875 語（83%）、いずれか一方にアクセント表記のあるものは 154 語（15%）、2 資料とも無線であるものは 28 語（3%）であった。この数値は、著者が基本的にアクセントを表記する方針を持っていたことをうかがわせるものである。

ることを明らかとなったため、「方言と習俗」のアクセント表記には、資料の成立時期から推定して「昭和 10 年代の」、また 2.1 や 2.2 の結果より「小筑紫村の」アクセントが反映されているとみてよいと考える。

3. はね線と山型線

「方言と習俗」のアクセント表記には、それらが示しているアクセントが不明な線形が複数存在している（表 1 参照）。第 3 節ではそのうち、「方言と習俗」に比較的多く存在し、性質も類似していると考えられるはね線と山型線について考察を加える。

3.1 内部徴証より

「方言と習俗」では、同じ語であっても「採集」と「部類別」でアクセント表記が異なる場合がある（表 5）。一部の線形では、こうしたアクセント表記の差異を手掛かりに、「方言と習俗」独自のアクセント表記の成立過程や各アクセント表記の示すアクセントを考察できる。3.1 では、はね線・山型線と関係があるとみられる重ね書きの存在から、はね線・山型線について考察する。

表 5　はね線・山型線・重ね書きの例

線形	はね					山型						
	はね＋重書	はね＋重書/はね		直線/はね＋重書		山型＋重書	山型＋重書/山型		直線/山型＋重書		はね+重書/山型	
資料	採集	採集	部類別	採集	部類別	採集	採集	部類別	採集	部類別	採集	部類別
例	コッホリシ	アゲル	アゲル	ミツゴ	ミツゴ	イガイガユ	カーラ	カーラ	サツマゴル	サワマレル	フイゴマツリ	フイゴマツリ

「方言と習俗」の見出し語で、重ね書きがあるように見えるのは 67 語である（表 6）。このうち直線と重ね書きという組み合わせは 9 語で、特殊な形状の傍線と重ね書きという組み合わせは 58 語（87%）である。また、58 語のうち、はね線

と重ね書きが同時に表れるのは 37 語（64%）、山型線と重ね書きが同時に表れるのは 18 語（31%）である。

表 6　「方言と習俗」における重ね書きと傍線の形状（語）

重ね書きのある語	直線+重ね書き		9
	直線以外+重ね書き	はね線+重ね書き	37
		山型線+重ね書き	18
		その他の特殊な線+重ね書き	3

特殊な形状の傍線と重ね書きという組み合わせである 58 語のうち、55 語がはね線もしくは山型線との組み合わせであることから、重ね書きははね線･山型線の示すアクセントの手掛かりになると考える。

次に、特殊な形状の傍線と重ね書きという組み合わせの 58 語を表 7 に示す。表中の**太字**は重ね書き、下線ははねもしくは山のある拍を示す[25]。

はね線と重ね書きの組み合わせである 37 語[26]のうち、「採集」か「部類別」のいずれかで、はねのある拍に重ね書きがあるもの（表 5 のコッポリショ･ミツゴのような語）は 28 語である。山型線と重ね書きという組み合わせである 18 語のうち、「採集」か「部類別」のいずれかで、山のある拍に重ね書きがあるもの（表 5 のイガイガユー･サツマジルのような語）は 15 語である。これより、重ね書きとはね･山は同じ拍に現れる傾向があるといえる。

また、「採集」では、はね線と重ね書きという組み合わせであるが、「部類別」でははね線のみになっている語（表 5 のアゲルのような語）は 18 語存在し、「採集」では山型線と重ね書きという組み合わせであるが、「部類別」では山型線のみになっている語（表 5 のカーラのような語）も 8 語存在する。

[25] 表中の A/B は、「採集」のアクセント表記/「部類別」のアクセント表記の意。拍と拍の間に山がある場合（図 2 のオンダー、オンラーのような山型線）には、山の直前にある拍に下線を付した。※は重ね書きの存在が不明確であることを示す。

[26] はね/山型の 1 語（フイゴマツリ、表 5 参照）を含む。フイゴマツリの傍線の形状は「採集」と「部類別」で異なるが、ともに 4 拍目にはね･山がある（ただし重ね書きは 3 拍目にある）。この例は、はね線･山型線のはね･山が共通する要素を持つことを示唆するものである。

表７　重ね書きと特殊な傍線が現れる語

線形	見出し	採集	部類別
はね+重書	スキ		H**H**
	ヤー	**H**H※	
	アセボ	△**HH**※	
	アセモ	○**HH**※	
	オドカス	LL**HH**	
	マロタゴシ	H**H**HHH※	
	コッポリショト	L△HH**H**	
	アリノトワタリ	LLHHHH**H**	
はね+重書/はね	ヤリ	○**H**	○H
	アゲル	△H**H**	○HH
	イケス	L**HH**	○H○
	サイケ	○H**H**	HH○
	シッテ	HH**H**	HHH
	ショーメ	○H**H**	○HH
	ナマヅ	△H**H**	△HH
	ホトリ	○**H**H	LHH
	マスゲ	△H**H**	LH○
	ウラキリ	LLH**H**	LHH△
	カラウト	○HH**H**	○HH○
	キタゴチ	LHH**H**	○HH○
	キリブサ	○HH**H**	LHHH
	タンジヤク	LLH**H**	△HHH
	ダンヂリ	**HH**HH	△HHH
	マタクラ	LHH**H**	LHH○
	エベッサン	LH**HH**H	LHHHH
	オーダウエ	○HHH**H**	LHHH○
	ナシロハリ	LH**H**H○	LHHHH
	オサバイサン	LLH**HH**○	LHHHH△ △HHHHL △HHHH△
	オンゴロモチ	○HHHH**H** LLLLLH	LHHHH○
	ゴシンタイバイ	LHHHHH**H**	△HHHHHH
	ケンリョーノツカエ	△HH**HHH**HL	LHHHHHH○
はね/はね+重書	アブラデ	○HH**H**※	LH**H**H
直線/はね+重書	シメ	LH	H**H**
	ミツゴ	LLH	△HH ○H**H**
反り+重書/はね+重書	イレ	H**H**	H**H**
外折れ+重書/はね	ダイコジリ	○**HH**H○	○HHHH

線形	見出し	採集	部類別
山型+重書	オンラー	L○**H**○	
	コソバイー	○HH**H**△	
	イガイガユー	H**H**HLLL	
	オヤマカケル	○HHH**H**△	
	トーゼンナイ	△HHH**H**○	
	チートリソコナウ	○H**H**HHH○L	
	イモダネフセ	○HH**H**HL	
山型+重書/山型	カーラ	H**H**H	△HL
	サバイガミ	○HH**H**○	△HHH△
	バイモチ	△H**H**△	LHH△
	キンチャクアミ	○HH**H**HL	△HHH△L
	サンヤブクロ	△HH**H**HL	○HHH○L
	ウマノコエタテル	LHHHH**H**○LHHHHH**H**L	
	ハッショノヤマイ	LHHH**H**H△	LHHH**H**HL
	サデコカス	H**H**H△L	HHH○L
山型/山型+重書	ボーズハシラシ	△HHHHHL	○**HH**H**H**HL
直線/山型+重書	クダナガシ	LLHLL	○H**H**△L※
	サツマジル	LLLHL	△HH**H**○※
はね+重書/山型	フイゴマツリ	△H**H**LL	LHHHH△
内寄り+重書	ボイマクル	LH**H**△L	
内寄り+重書/内寄り	シュージュー	**H**○LL	H○LL
内折れ+重書/直線	スーチャン	**H**H△L	HLLL

1.1.2 で述べたように、「方言と習俗」は「採集」「部類別」の順で書かれたと考えられるため、「採集」の重ね書きが「部類別」ではね線･山型線に変更されている例は、重ね書きがはね
線や山型線という形式が成立する過程で発生した表記であることを示していると考える。また、著者が 1 拍だけが高音調であるアクセントとして記述したものを、何らかの理由ではね線･山型線に変更した様子もうかがえる。

次に、語内の 1 拍に付された傍線が、はね線･山型線へと変更された理由について考察する。まず、傍線はその拍が高音調であることを示す表記である。語内の 1 拍にのみ付された傍線が、はね線･山型線に変更されることで延長されているということは、直線を付した拍以外の拍も高音調であると著者が判断したことを意味すると考える。

直線を付した拍以外にも高音調が確認されたために線形が変更されたという可能性は、別の内部徴証からも指摘できる。表 8 は「採集」の見出し語のうち、3-4 拍語かつアクセント表記が直線である 653 語のアクセントを示したものである[27]。

表 8　「採集」においてアクセント表記が直線である 3-4 拍語（語）

拍	高音調が 1 拍のみ	高音調が連続する
3	HLL（43）	HHH（3）
	LHL（155）	HHL（3）
	LLH（109）	LHH（2）
4	HLLL（46）	HHLL（4）
	LHLL（98）	LHHL（1）
	LLHL（118）	LHHH（5）
	LLLH（58）	LLHH（8）

3 拍語のうち、高音調が 1 拍のみである語は 315 語中 307 語（97%）、4 拍語では 338 語中 320 語（95%）である。一方、2 拍以上高音調が連続するアクセントが直線で示されている語は、3 拍語･4 拍語を合計しても 26 語である。

現代東京式アクセントにおいて優勢な型である平板型が表 8 中にほとんどみられないこと、2.2.2.2 においてはね線が LH･LHH･LHHH のアクセントを示しているという結果であったことをふまえると、連続する高音調は直線では示さずに、

[27] 直線かどうか判断しかねる語、線が 2 か所に分かれている語、線末端位置が不明であったり促音が含まれていたりするなどして音調不明の拍がある語は省いた。

特殊な形状の線で示すという方針が存在していたことを推測できる。つまり、直線のはね線･山型線への変更は、元々直線が引かれていた拍を含めて高音調とみなせる拍が連続していたためであると考える。

一旦、3.1 の考察をまとめる。重ね書きは、はね線･山型線とともに現れる例が多く、直線にはね線や山型線が上書きされるという順序で成立したと考えられるものである。また、はね線や山型線が示しているのは、図 8 に示すような高音調が連続するアクセントであり、かつ、はね･山のある拍が特に高く聞こえるようなアクセントであったと推測できる。

はね線… コッポリショ	山型線… サツマジル

図 8　想定されるはね線･山型線のアクセント（表 5 参照）

3.2　中平論文の・印とはね線･山型線

はね線･山型線のはね･山は、それらを付された拍が一段階高く聞こえることを表わしているのではないかという想定について、中平論文のアクセント表記から検証する。表 9 は、「方言と習俗」と中平論文との間で対照可能であった 218 語を、中平論文の・印の位置で分類したものである。

表 9　中平論文における・印の位置と「方言と習俗」のアクセント

中平論文		語数	方言と習俗			
			直線	はね線	山型線	その他
語頭に・	HL	13	13			
	HLL	7	7			
	HHLL	1				1
	HLLL	5	4			1
	HLLLL	1	1			
語中に・	LHL	33	33			
	LHLL	4	3		1	
	LHLLL	2	2			
	LLHL	18	14	1	3	
	LLHLL	1			1	
	LLHLLL	1	1			
	LLLHL	4	1		3	
	LLLHLL	2		1	1	
	LLLLHL	1			1	
	LLLHLLL	1			1	
	LLLLHLL	1			1	

中平論文		語数	方言と習俗			
			直線	はね線	山型線	その他
語末に・	LH	22	18	4		
	LLH	56	22	34		
	LLHH	1		1		
	LLLH	41	11	28	2	
	LLLLH	2	2			
	LLLLLH	1	1			
計	語頭に・	27	25			2
	語中に・	68	54	2	12	
	語末に・	123	54	67	2	

対照可能であった語は、いずれも「方言と習俗」では直線で示されている場合が多い。しかし、中平論文において語頭に・印がある語と比較すると、語中に・印のある語は「方言と習俗」においては山型線で、語末に・印のある語は「方言と習俗」においてははね線で現れやすい傾向があるといえる。

語中に・印のある語と山型線、語末に・印のある語とはね線の関係を整理したものが表 10 である。表中の灰色のセルは、・印と山の位置、・印とはねの位置が一致しているものである。

表 10　中平論文で語中･語末に・印があり「方言と習俗」で山型線･はね線の語

「方言と習俗」の見出し	「方言と習俗」のアクセント	中平論文のアクセント		「採集」のアクセント	「部類別」のアクセント	
オドロク	山型線のみ	語中に・	LLHL	△H**H**○		
コソバイー			LLLHL	○H**H**H△		
サブシナイ			LLLHL	△HH**H**○		
カイキイワイ			LLLHLL	LH**H**HH○		
トーゼンナイ			LLLLHL	△HHH**H**○		
ナマグサモン			LLLHLLL	○HH**H**○L	○HH**H**HL	
オビトキヒロゲ			LLLLHLL		○HH**H**HLL	
テバンゴ	直線と山型線		LHLL	○H**H**H	HLLL	
ヒワコイ			LLHL	LLHL	LH**H**H	
ヘラコイ				LLHL	△H**H**H	
カヅライシ			LLHLL	LLHLL	○H**H**H△	
サイトグワ			LLLHL	LLLHL	△HH**H**○	
ワサ	はね線のみ	語末に・	LH	○**H**		他 3 語
ウワク			LLH	△H○	LH**H**	他 26 語
エガマ				LH○（内折れ）	LH**H**	
レンポー			LLHH	△H**H**L		
モクタイ			LLLH	△HH**H**		他 20 語
キリブサ				○HH**H**	LHH**H**	
トバス	LLH とはね線		LLH	LLH	△H○	他 3 語
キラズ	LHH とはね線			LHH	○H**H**	
フンゴメ（ホンゴメ）	LHHH とはね線		LLLH	LHHH	○HH△	他 1 語
ホテアシ	LLHH とはね線			LLHH	○HH**H**	他 1 語
ホーレキ				LL○○	△HH○	
ウラツケ	LLLH とはね線			LLLH	○HH○	他 1 語

中平論文で語中に・印があり、「方言と習俗」において山型線が付されている語は 12 語、そのうち・印の位置と山の位置が共通している語は 8 語である[28]。また、中平論文では語末に・印があり、「方言と習俗」においてはね線が付されている語は、1 語を除いてはね線のはねが語末にある。よって、中平論文の語中の・印と「方言と習俗」の山型線の山、中平論文の語末の・印と「方言と習俗」のはね線のはねには関係があるといえる。

基本的に、中平論文の・印は 1 語につき 1 か所であることから、・印は語内で特に高く聞こえる拍に付されていると考えられる[29]。そのような・印と対応関係のあるはね線・山型線のはね・山は、語の中で際立って高く聞こえる拍を示すものであると考える。

3.3　現地調査より

3.1 や 3.2 より想定される、連続する高音調のうち 1 拍だけが特に高く聞こえる現象は、現地調査においても実際に確認されている。しかし、この現象は特定の語に安定して観察できる性質のものではなかった。現地調査でアクセントを複数回記録でき、かつ 1 拍だけ特に高く聞こえた場合とそうでない場合があった語の例を表 11 に示す[30]。

表 11 の例から、同一話者の発話においても、1 拍だけ特に高く聞こえる場合とそうではない場合があることがわかる。つまり、3.1 や 3.2 で想定された音の高低は、特定の語に一定して現れる性質のものではないようである。そのため、1 拍だけが特に高く聞こえるという現象は、現在の小筑紫町方言においては他のアクセント型の内部変異であり、音韻的に区別のあるものではないと考える。

---

[28] 山が拍と拍の間にある場合（図 2 のオンラーのような山型線）は、前の拍に山があるとみなして整理しているためここには含めていないが、・印の 1 拍前に山がある 3 語についても、・印と山の位置が共通しているとみなすこともできる。

[29] ・印の位置がアクセント核の位置を示している可能性もあるが、ここでは重ね書きの存在をふまえて、・印が高く聞こえる拍を示していると考える。

[30] 「意味」列の記述は、「方言と習俗」の解説を稿者が要約したものである。「「方言と習俗」アクセント」列の*斜体*ははね や山がある拍を示す。「発音」行の助詞などが付かない形は、語単体の発話という意味ではなく、後続する助詞などのアクセントを記録できていないものである。「現地調査で得たアクセント」の H は H より一段階高い音高を、F は下降を示す。「話者情報」列で数行がまとめられている場合は、それらが同一話者による発話であることを示す。なお、これらのデータには、説明の口調である場合とそうではない場合が混在している。

表 11　連続する高音調のうち 1 拍だけが特に高く聞こえた語の例

現在のアクセント	単語	意味	語形	方言と習俗	現地調査	話者情報
尾高・平板系	アラガキ	田植えの準備。田を鋤起こして均す作業。	アラガキ	LLLH	LHHH	80 代/男性
			アラガキは		HHH<u>H</u>　L	60 代/女性
	イタヅリ	いたどり。	イタヅリ	採集 LLLH 部類別 LHH*H*（はね）	LHHH	60 代/男性
			イタヅリ		LHH<u>H</u>	
	ウラツケ	祭りの翌日。	ウラツケと	採集 LLLH 部類別 ○HH○（はね）	HHHH　H	80 代/男性
			ウラツケを		HHH<u>H</u>　L	
			ウラツケを		LHHH　L	
	田ノ浦	（小筑紫町内の地名）	タノウラ		HHHH	70 代/男性
			タノウラ		HHH<u>H</u>	70 代/男性
			タノウラを		HHH<u>H</u>　L	老年/女性
			タノウラから		LHHH　HF	60 代/男性
	ボーズハシラカシ	盆頃に降るにわか雨。	ボーズハシラカシ	○HH*H*HHL（山型） （ボーズハシラシ）	LHHHHHHH	80 代/女性
			ボーズハシラカシ		LHH<u>H</u>HHH	
	巻き網		マキアミ		HHHH	70 代/男性
			マキアミ（ユーテ）		LHH<u>H</u>	
	みぞおち		ミゾオチ	採集 LLHH（はね） 部類別 LHHH（はね） （ミズオチ）	LHHH	80 代/男性
			ミゾオチは		LHH<u>H</u>　H	
中高系	オミコシ	神輿。	オミコシ	LLHL	LHHL	80 代/男性
			オミコシ		LH<u>H</u>L	

現地調査の結果より、「方言と習俗」のはね線や山型線は、表 11 のような音の高低が聞き取られたものではないかと考える[31]。また、表 11 より、1 拍だけ特に高く聞こえる現象と助詞との関係がうかがわれるが、現在のところ分析に足るだけのデータはなく、詳細は不明である。このような、連続する高音調のうち 1 拍だけが特に高く聞こえる現象については、助詞やイントネーションとの関係を含め、更なる調査が必要である。

4. まとめ

本稿では、高知県幡多方言に関する資料「小筑紫村の方言と習俗」の見出し語に付された傍線について、資料内調査、文献調査、現地調査の結果をもとに考察を行った。

第 1 節では、「方言と習俗」について概説し、「方言抄」の記述などから、見出し語に付された傍線が線式のアクセント表記の一種である可能性を述べた。

[31] 昭和 10 年代の実際のアクセントを知ることはできないが、当時の小筑紫村方言には連続する高音調の中で 1 拍だけ高く聞こえる現象を毎回確実に確認できる語群が存在していた、著者が調査を行った際に偶然確認されたのが 1 拍だけ高く聞こえるアクセントであった、著者や稿者が緩やかにピッチの上昇する部分を H、ピッチの頂点にあたる拍をもう一段階高い H であると聞きなした、などの可能性が考えられる。

第 2 節では、傍線の分析を行った。まず 2.1 では、小筑紫村に隣接する三原村方言のアクセント資料を用いた調査によって、「方言と習俗」の傍線がアクセント表記であることを明らかにした。続いて 2.2 では、現在の小筑紫町方言から「方言と習俗」のアクセント表記の分析を試みた。その前段階として 2.2.1 では、昭和 10 年代を生きていた小筑紫町方言話者と現在の小筑紫町方言話者のアクセント体系を比較し、現在の小筑紫町方言アクセントを、昭和 10 年代の小筑紫村方言アクセントの代わりとして傍線の分析に用いることができると判断した。続いて 2.2.2 では、「方言と習俗」のアクセント表記と現在の小筑紫町方言のアクセントを対照し、「方言と習俗」のアクセント表記が、条件付きで現在の小筑紫町方言アクセントと対応していることを明らかにした。

第 3 節では、内部徴証・中平論文・現地調査のデータから、はね線・山型線が表すアクセントについて考察した。

以上、本稿では、

①「方言と習俗」の傍線は、傍線の付された拍が高音調であることを示すアクセント表記であること

②「方言と習俗」のアクセント表記は、「昭和 10 年代の」「小筑紫村の」アクセントが記されているとみなせること

の 2 点を明らかにした。また、特殊な形状の傍線についても、

③はね線は 1 拍目以外が高音調のアクセントを示していること

を明らかにし、

④はね線・山型線のはね・山は、連続する高音調のうち 1 拍だけが特に高く聞こえる現象を示している可能性があること

を指摘した。

以上の結果から、「小筑紫村の方言と習俗」は、高知県幡多郡旧小筑紫村の方言資料・民俗資料のみならず、昭和 10 年代の小筑紫村方言のアクセントを記録した音声資料としても位置付けることができると考える[32]。

本稿では、傍線がアクセント表記であることの証明を目的としたため、はね線・山型線以外の特殊な形状の傍線が示すアクセントや、小筑紫村（町）方言のアクセント体系の変化などについての考察は行えなかった。今後の課題としたい。

[32] 「方言と習俗」原本のアクセント表記は、https://sites.google.com/view/kodzukushimuraaccent にて公開しており、今後、佐竹（2020）のアクセント索引として整備する予定である。

参考文献

金田一春彦（1974）『国語アクセントの史的研究—原理と方法』塙書房.
金田一春彦（監修）・秋永一枝（編）（2005）『新明解日本語アクセント辞典』三省堂.
佐竹一男（2020）『小筑紫村の方言と習俗』.
杉山正世（1955）「渭南方言区の設定について」『愛媛国文研究』3，pp.113-124（井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎（編）（1997）『日本列島方言叢書 22 四国方言考① 四国一般・徳島県・高知県』ゆまに書房 所収）.
宿毛市史編纂委員会（編）（1977）『宿毛市史』宿毛市教育委員会.
土居重俊（1958）『土佐言葉』高知市立市民図書館.
中平満洲（1963）「三原の方言について（1）」『土佐方言』6，方言研究同好会, pp.11-20.
————（1964a）「三原の方言について（2）」『土佐方言』7，方言研究同好会, pp.22-26.
————（1964b）「三原の方言について（3）」『土佐方言』8，方言研究同好会, pp.17-24.
————（1965a）「特集（田植と稲刈の方言）　幡多郡　三原村」『土佐方言』9，方言研究同好会, pp.11-14.
————（1965b）「三原の方言について（4）」『土佐方言』10，方言研究同好会, pp.44-50.
————（1967）「三原方言語彙（さ～ん）」『土佐方言』14，方言研究同好会, pp.34-51.
服部四郎（1933）『国語科学講座VII 国語方言学 アクセントと方言』明治書院.
平山輝男（1940）『全日本アクセントの諸相』育英書院.
山口幸洋（1986）「四国西南部東京式アクセントの性格」『方言研究年報』29, pp.205-218（山口幸洋（2003）『日本語東京アクセントの成立』港の人 所収）.

辞書類

土居重俊・浜田数義（編）（1985）『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団.
日本語学会（編）（2018）『日本語学大辞典』東京堂出版.

参考資料

佐竹一男著「小筑紫村の方言と習俗」（未定稿）.
佐竹一男著「方言抄（一）」.

付記　本稿は第 68 回高知大学国語国文学会研究発表会（2019 年 11 月 30 日）での口頭発表に加筆・修正を加えたものである。

（さいとう・かおり　人文社会科学専攻修士課程 1 年）